

すずの兵隊さん

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

青空文庫

あるところに、二十五人のすずの兵隊さんがいました。この兵隊さんたちは、みんな兄きょうだい弟だいでした。なぜって、みんなは、一本の古いすずのさじをとかして作られていますから。

どの兵隊さんも、鉄砲てつぱうをかついで、まつすぐ前をむいていました。着ている赤と青の軍服は、たいへんきれいでした。兵隊さんたちは、一つの箱はこの中に寝ねていたのですが、そのふたがあけられたとき、この世の中でいちばん先に耳にしたのは、「すずの兵隊さんだ」という言葉でした。

そうさけんだのは、小さな男の子で、うれしさのあまり、手をたたいていました。その子は、誕生たんじょうび日のお祝いに、すずの兵隊

さんたちをもらったのです。

男の子は、さっそく、兵隊さんたちを、テーブルの上にならべました。見ると、どの兵隊さんも、とてもよく似ていて、まるでそっくりです。ところが、中にひとりだけ、すこし変ったのがいました。

かわいそうに、その兵隊さんは、足が一本しかありません。それというのも、この兵隊さんは、いちばんおしまいに作られたものですから、そのときには、もうすずが足りなくなっていたというわけです。でも、その兵隊さんは、一本足でも、ほかの二本足の兵隊さんたちに負けないくらい、しっかりと立っていました。

では、この一本足の兵隊さんについて、これからおもしろいお

話をしてあげましょう。

兵隊さんたちのいるテーブルの上には、ほかにもまだ、いろいろなおもちゃが置いてありました。いちばん目につくのは、紙でつくった、きれいなお城でした。小さな窓からは、中の広間も見えます。お城の前には、小さな木が、何本か立っていました。その植えこみにかこまれて、小さな鏡がありました。これは池のつもりなのです。池の上には、ろうでできたハクチョウが、幾羽いくわもあそんでいて、そのまっ白な姿が、池の上に美しくうつっていました。なにもかも、ほんとうにかわいらしく見えました。

でも、なんとといっても、いちばんかわいらしいのは、開いたお城の門のところむすめに立っている、小さな娘さんでした。やっぱり、

この娘さんも、紙で作られてはいましたが、でもスカートなどは、それはそれはきれいなリンネルを使つて、こしらえてありました。肩かたには、小さな、細い、青いリボンが、シヨールのようにひらひらしていました。リボンのまんなかには、娘さんの顔くらいもある、大きな金モールのかざりがキラキラ光っていました。

小さな娘さんは、りょううで両腕をぐつと高くのばしてました。つまり、この娘さんは、おど踊り子だったのです。かたほうの足も、ずいぶん高くあげてました。この足が、一本足の兵隊さんには見えませんでした。それで、兵隊さんは、この娘さんも、きつと、ぼくと同じように、かた足しかないんだな、と思いました。

「あの人は、ぼくのお嫁よめさんにちようどいいや」と、兵隊さんは

考えました。「だけど、あの人は、ちよいとりっぱすぎるかな。なにしろ、ああして、お城に住んでいるっていうのに、ぼくときたら、こんな箱しかないんだからなあ。それも、ぼくひとりものじゃなくて、二十五人も仲間がいつしよにいるんだもの。こんなところにや、あの人なんか住めそうもない。でも、お友だちくらいにでもなれりやいいがなあ」

兵隊さんは、そのテーブルの上にあつた、かぎたばこの箱のうしろに、ごろりと横になりました。そうしていれば、小さな美しい女の人が、よく見えたからです。その女の方は、うまくつりあいをとりながら、やつぱり、かた足で立っていました。

やがて、夜がふけました。ほかのすずの兵隊さんたちは、みんな

な、箱の中へ帰りました。うちの人たちも、寢床ねどこにはいりました。すると、こんどは、おもちゃたちのあそぶ時間になりました。みんなは、お客さまごつこだの、戦争ごつこだの、舞踏会ぶとうかいだのをはじめました。

すずの兵隊さんたちも、いつしよにあそびたくなつて、箱の中で、しきりにガチャガチャやりました。けれども、どうしても、ふたをあけることができません。そのあいだにも、だんだん、にぎやかになりました。くるみわりがトンボ返りをうつかと思うと、石筆せきばんは石盤の上をはねまわります。ますますたいへんなさわぎになりました。とうとう、カナリアまでも目をさまして、みんなといっしょにおしやべりをはじめました。もつとも、カナリアは、

歌をうたっているのですけれど。

こんなさわぎの中でも、自分のいる場所を、ちつとも動かないものが、ふたりだけいました。あの一本足のすずの兵隊さんと、小さな踊り子です。娘さんは、あいもかわらず、つまさきでまっすぐ立って両腕を高く高くあげていました。兵隊さんも同じように、一本足でしつかり立っていました。目だけは、ほんのちよつとも、娘さんからはなしませんでした。

そのうちに、時計が十二時をうちました。とたんに、かぎたばこの箱のふたが、ポンとあきました。ところが、どうでしょう。中には、たばこははいってなくて、そのかわりに、ちつぽけな黒おにがはいっていました。じつは、これは、しかけのしてある、

おもちゃのびっくり箱だったのです。

「おい、すずの兵隊」と、その小おには言いました。「そんなにいつまでもながめているなよ」

けれども、すずの兵隊さんは、なんにも聞えないようなふりをしていました。

「ふん、あしたの朝まで待つがいい」と、小おには言いました。つぎの朝になりました。子供たちが起きてきて、すずの兵隊さんを、窓のところへ置きました。

すると、どうしたというのでしょうか。あのいやらしい小おにのしたことか、それとも、すきま風のしたことか、それはわかりませんが、きゆうに窓がパタンとあいて、兵隊さんは、四階から下

の道へ、まつさかさまに落ちていったのです。おそろしい速さです。一本足を上にむけ、軍帽ぐんぼうを下にして、とうとう、往来のしき石のあいだに、剣けんのついた鉄砲の先をつつこんでしまいました。すぐに、女中といっしよに、あの小さな男の子がおりてきて、さがしはじめました。ふたりは、もうすこしでふみつけそうになるくらい、兵隊さんのすぐそばまできたのですが、それでも、見つけることはできませんでした。もしも兵隊さんが、「ここですよ」とよびさえすれば、きつと見つかったでしょう。ところが、兵隊さんのほうは、軍服を着ているのだから、大きな声を出してさげんだりするのはみつともない、と思つたのです。

そのうちに、雨が降りだしました。はじめは、ぽつりぽつりと

降っていました。だんだんひどくなつて、とうとう、大つぶの雨になりました。

やがて、雨があがると、いたずら小僧こぞうがふたり、そこへやつてきました。

「おい、見ろよ」と、ひとりが言いました。「あんなところに、すずの兵隊が落つこちてるぞ。ボートに乗つけてやろうぜ」

そこで、ふたりは、新聞紙でボートをつくり、そのまんなかすずの兵隊さんに乗せて、どぶに流しました。いたずら小僧どもは、そのそばを走りながら、手をたたいてよろこびました。

おやまあ、なんとというひどい波でしょう！ なんとという速い流れでしょう！ さっきの雨のために、どぶの水がふえて、流れは

すつかり速くなっているのです。紙のボートは、はげしくゆれて、ときには、目がまわるほど、くるくるとまわります。そのたびに、すずの兵隊さんは、ぶるぶるふるえました。けれども、しつかりと立って、顔色ひとつかえずに、鉄砲をかついで、まっすぐ前を見つめていました。

きゆうに、ボートが、長いどぶ板の下にはいりました。とてもとても暗くて、まるで、あの箱の中にはいったときとおんなじです。

「いったい、ぼくは、どこへ行くんだらう？」と、兵隊さんは思いました。「そうだ、そうだ。こんなになつたのも、きつと、あの小おにのやつの子だ。ああ、せめて、あの小さな娘さんが、

このボートに乗っていてくれたらなあ。そうすりゃ、この倍くらい暗くたったって、平気なんだがなあ」

このとき、どぶ板の下に住んでいる大きなドブネズミが、姿をあらわしました。

「おい、ここを通る切符きつぷを持つてるか？」と、ドブネズミがたずねました。「おい、切符を持つてるかったら」

けれども、すずの兵隊さんは、だまりこくったまま、ただ、鉄砲を、かたくかたくにぎりしめました。ボートは、どんどん流れていきます。ドブネズミは、かんかんにおこって、あとを追いかけました。うわあ、歯をギリギリいわせて、木のきれっぱしや、わらにむかってどなっています。

「そいつをとめてくれえ！ そいつをとめてくれえ！ ここを通るのに、金もはらわなきや、切符も見せなかつたんだ」

ところが、流れは、ますますはげしくなるばかりです。もう、どぶ板のむこうのはしに、明るいお日さまの光が、さしているのが見えてきました。ところが、たいへん。それといっしょに、どんなに勇ましい人でもふるえあがってしまいそうな、ゴーゴーいう音が聞えてきたのです。いったい、なんでしよう。それは、どぶの水が、どぶ板のおしまいところで、大きな掘割りに落ちこんでいる音だったのです。あぶないこと、このうえもありません。なにしろ、わたしたち人間が、大きな滝たきにむかって流れていくのと同じことなのですからね。

ボートは、もう、すぐそのそばまで来ました。とめたくても、とめることもできません。いよいよ、ボートはどぶ板の外へ出ました。かわいそうに、すずの兵隊さんは、むがむちゆうで、からだをかたくしていました。でも、目をぱちぱちなんか、けっしてしませんよ。

ボートは、三、四回、くるくるとまわりました。もう、水はボートのふちまでできています。いよいよ、沈しずむほかはありません。すずの兵隊さんは、首のところまで水につかりました。ボートは、ずんずん沈んでいきます。ボートの紙も、だんだんゆるんできました。とうとう、水は兵隊さんの頭の上までかぶさりました。――

そのとき、兵隊さんは、もう二度と見ることでできない、あのかわいらしい、小さな踊り子のことを思い出しました。すると、すずの兵隊さんの耳もとに、こんな歌が聞えてきました。

さようなら、さようなら、兵隊さん。

あなたは、死ななきやならないのよ。

そのとき、ボートの紙がさけて、すずの兵隊さんは、水の中へ落ちました。と、その瞬間しゅんかん、大きなさかながおよいできたかと思うと、ぱっくり、兵隊さんのみこんでしまいました。

おやまあ、さかなのおなかの中って、なんて暗いんでしょう！

さっきのどぶ板の下なんかとは、くらべものになりません。おまけに、せまくるしくつてたまりません。それでも、すずの兵隊さんはしつかりしていました。あいもかわらず、鉄砲をかついで、じつと横になっていました。――

それから、さかなは、しばらくおよぎまわっていましたが、きゆうに、ひどくあばれだしました。そのあげく、とうとう、動かなくなりました。そのうちに、いなずまのようなものが、ピカリと光りました。とたんに、明るい光がさしこんできました。そして、だれかが、

「あら、すずの兵隊さんだわ」と、大きな声でさげびました。

つまり、このさかなは、漁師りょうしにつかまって、市場に持ってい

かれ、そこでお客に買われて、そうして、この台所にきたというわけなのです。そして、いま女中が大きなほうちようで、このさかなのおなかを切ったところだったのです。

女中は、兵隊さんのからだのまんなかを、二本の指でつまんで、^{へや}部屋に持っていきました。みんなは、さかなのおなかの中にはいつて、あちこち旅をしてきた、このめずらしい人を見たりしました。でも、すずの兵隊さんは、そんなことを自慢じまんしたりはしません。

みんなは、すずの兵隊さんを、テーブルの上にのせました。すると、——おやおや、世の中には、ほんとうにふしぎなことがあるものですね。兵隊さんは、もといた部屋にもどってきていたの

です。おなじみの子供たちの顔も見えます。テーブルの上にあるおもちゃも、おなじみです。それから、かわいらしい小さな踊り子のいる、あの美しいお城もあります。娘さんは、あいかかわらず、かた足で立っていて、もう一方の足を高くあげていました。この娘さんも、ほんとうにしっかりしています。これを見ると、すずの兵隊さんはすっかり感心して、もうすこしで、すずの涙をこぼなみだしそうになりました。だけど、涙をこぼすなんて、いくじがない、と思いました。

兵隊さんは、娘さんを見つめました。娘さんも、兵隊さんを見つめました。でも、ふたりとも、なんにも言いませんでした。

とつぜん、小さな男の子のひとりが、すずの兵隊さんをつかん

だかと思うと、いきなり、ストーブの中へ投げこみました。どう考えても、そんなことをされるようなわけはありません。ですから、これも、きつと、あの箱の中の小おにのしわざなのでしよう。

すずの兵隊さんは、ほのおにあかあかと照らされて、おそろしい熱さを感じました。けれども、その熱さは、ほんとうの火のための熱なのか、それとも、心の中に燃えている愛のための熱なのか、はつきりわかりませんでした。美しい色は、もう、すっかり落ちてしまいました。それは、旅の途^{とちゆう}中でなくなつたのか、それとも、深い悲しみのためにきえたのか、だれにもわかりません。

兵隊さんは、小さな娘さんを見つめていました。娘さんも、兵隊さんを見つめていました。そして、兵隊さんは、自分のからだ

がとけていくのを感じました。それでも、やっぱり、鉄砲をかついだまま、しつかりと立っているのです。

そのとき、とつぜん、ドアがあいて、風がさつと吹きこんできました。踊り子は、まるで空気の精のように、ひらひらと吹きとばされて、ストーブの中のすずの兵隊さんのところへ飛んできました。と思うまもなく、あつというまに、めらめらと燃えあがって、消えてしまいました。もうそのときには、すずの兵隊さんもすっかりとけて、一つのかたまりになっていました。

あくる朝、女中がストーブの灰をかきだすと、兵隊さんは、小さなハート形の、すずのかたまりになっていました。踊り子のほうは、金モールのかざりだけがのこっていました。それも、ま

っ黒こげになっていました。

青空文庫情報

底本：「人魚の姫 アンデルセン童話集※」[#ローマ数字]、P-1
3-21]」新潮文庫、新潮社

1967 (昭和42) 年12月10日発行

1989 (平成元) 年11月15日34刷改版

2011 (平成23) 年9月5日48刷

入力：チエコ

校正：木下聡

2020年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

すずの兵隊さん

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>